

## 巻頭言



### 確かな想像力が求められている今……

北海道技術士センター  
リージョナルステート研究会会長  
技術士（建設部門）

市村 一志

昨年の10月、端を発して社会問題になった建築の耐震強度偽装事件、建築界に属している私としては、起きるべきして起きたという感がしました。今の建築界の生業は、少しでも「安く、早く」の価値観に支配されています。その結果の一部が「安かろう、悪かろう」を生み出してしまったと言えるでしょう。

現在の建築界に携わる技術者は、複雑で錯綜する工程の中の一つの歯車に過ぎません。支配する価値観の中では、一つの歯車を動かすことに精一杯で、全体を見る、自分の位置を確かめるという余裕がありません。全体が見えているという技術者がもしいるとしたら、それは錯覚しているのでしょうか。この耐震強度偽装事件は、一技術者が偽装した結果として多くの問題を引き起こしましたが、その関係者、原因、責任問題、補償、法制度の改正などは、これから明らかになっていくことでしょう。

さて、ここで私が注目したいことは、一技術者の偽装事件が、全国にまで波及し、個々の生活者に失望と不安を与えたこと、行政、建築関係者に深刻な問題を投げつけた広がりや底の深さです。勿論、彼は当初ここまで想像することも出来なかったであろうし、この事件を知った私たち技術者もここまで考え及ばなかったと思います。

しかし彼が行った行為が、私に理解できるとしたならば、行使した技術の結果が、誰にどのような影響を与えたかの想像力が欠落していたということです。しかも、企画する・図面を描く・計算する・建設する・販売するなど、どの段階のどの場面において

も、最終的に、買う人・住む人の生活者の顔が見えない、想像すらすることのない関係者の現実を見せられたことです。彼が耐震強度の偽装をする時、自分の家族やその状況を思う心と同じ様に、例えば自分の収入が絶たれるとしても、買う人・住む人の深い失望と不安を明確に想像できたとしたなら、止めることが出来たのではないかと思うのです。「何で今頃、まさか、俺だけが……」の顔には、生活者の顔を想像した技術者の誇りや姿勢があるとは到底見えませんでした。

今、建築技術者に問われていることは、一つの歯車にあっても、買う人・住む人の顔を明確に思い起こし、「良かった、ありがとう」と喜ばれる姿を想像することであり、そこに技術のすべての原点があることを想起すべきです。

私たち技術者（技術士という前に）は、社会の中で何らかの「ものづくり」に携わっています。しかし今問題なのは、この「もの」を使う生活者の気持ちを想像する力が不足しているか、あるいは欠落しているのではないかと言うことです。

技術者が社会で信頼ある立場を得ることは、生活者に対する真の想像力にあるということです。昨今言われている技術者の社会貢献についても同じです。生活者に対する想像力無くしては本当の貢献とは言えないのではないのでしょうか。

私たち技術者には、具体的でかつ明確な生活者への想像力が求められています。